

難波西鶴と海の道

【10】

森田 雅也

前回は松前の人魚伝説の話でしたが、日本に珍獣が漂着した話は多くあります。特に江戸時代後期の瓦版には、そのことが面白おかしく報道されていま

もありません。迷子のヒゲクジラですが、現代でも打ち上げられたり、迷い込んだりしたクジラやイルカは報道されますね。江ノ島で

例えば、江戸板橋に足のある魚が見つかったというのです。よく分析すれば、たまたま流れ着いたサンショウウオだったのです。現代でも10年ほど前に多

摩川に現れたアザラシをめぐって、「タマチヤン」フィーバーがありましたから、江戸時代でのパニックは容易に想像できますね。

品川沖では潮吹き穴が3つもある大クジラが捕まったという瓦版もありました。迷子のヒゲクジラですが、現代でも打ち上げられたり、迷い込んだりしたクジラやイルカは報道されますね。江ノ島で

「海獣」が現れたと記事になっています。

これは挿絵からも「アザラシ」に間違いありません。それでもやはり、人魚の類の報道が多かったようです。

日本に漂着した「珍獣」たち

富山県の四方浦には3つ目の人魚を鉄砲で撃ち殺したという記事があります。顔は若い女。二本の角が生えていたというのです。まさしく珍獣ですね。人魚の誤認については、世界的にシュゴン説が有名です。沖縄に生息するので、漂着して誤

認されたとする説もあります。少し無理があると思います。

日本ではやはり、「ラッコ」の方が漂着しやすく、人魚の誤認とな

ったようです。

「ラッコ」の存在はよく知られていました。室町時代の辞書にも「狸虎」とあり、江戸時代前期の俳諧書『毛吹草』には「松前」の記述に「狸虎」とあります。

この漂着したラッコ物語とも言うべき話が『西鶴諸国ばなし』巻五の三「楽しみは鱧結の手」です。

鎌倉の金沢に住む流円坊という出家が花鳥風月を楽しみ隠せいでいました。ある日、海に近いこの地に鱧結のカッパルが漂着します。彼らは薪を集めてくれたり、干し魚をくれたり、人間のようになつくので、よき友となります。

特に快く背中をかいてくれるので、これこそ「まこの手」と重宝していました。ところが、ある日から一匹が来なくなり、心配していると、百日ほどたつて2匹がそろってやってきました。

身分のある僧が着る紫の衣を持ってきたのですが、それは伊勢に住む恩師大淀の上人、円山の衣だったのです。まもなく円山上人遷化の訃報がもたらされます。

命がけのラッコのメッセンジャーも西鶴当時の「海の道」の利用例と言えますね。

(関西学院大学文学部文学言語学科教授)

海の道を利用